

## は じ め に

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（CPMS）は、これまで日光市国際交流協会による交流事業「食から世界を考える」の開催に協力してきました。2015年度からは、国際学部の外国人留学生、および留学経験日本人学生によって、栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業「外国人留学生と留学経験学生から見る日光の観光開発プラン『世界遺産+1』」を実施し、CPMSと日光市が協力しました。2016年度は、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターと日光市国際交流協会による主催事業として、「国際交流都市日光の再発見！—学生が考える日光のもう一つの地域発展プラン—」（通称日光プロジェクト）を実施し、日光・東照宮地区、中禅寺湖地区でフィールドワークを行い、シンポジウムを開催しました。さらに、2017年度は「国際交流都市日光の再発見—『まちづくりと観光開発』を留学生と考える—」をテーマに、日光・東照宮地区、栗山・湯西川地区でフィールドワークを行い、シンポジウムを開催し、2018年度は「国際交流都市日光の再発見—『足尾の歴史を活かした観光地づくり』を国際的視野から考える—」を足尾地区で実施しました。

そして、今回の2019年度は宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター／日光市国際交流協会主催事業として、「国際交流都市日光の再発見—『観光モデルを留学生と考える』プロジェクト」（通称：日光プロジェクト）を実施し、「国際交流都市日光の魅力」を①観光開発、②国際交流、③地域づくり、の3つの視点から再発見し、留学生と海外経験のある日本人学生の気づきによる「観光モデル」のためのフィールドワーク、シンポジウムを通じて提言を行い、日光に対して国際貢献・地域貢献していくことを目的にしています。

日光市には、年間1200万人以上の観光客が訪れています。また、外国人宿泊客数も9万人を超えていますが、全国的な外国人旅行者の伸びに比べれば、決して高い状況ではありません。さらに多くの外国人観光客を受け入れ、満足してもらうためには、プロモーションだけでなく、受入環境の整備・充実が課題となっています。今回の事業では、宇都宮大学の留学生・日本人留学生、日光市国際交流協会会員、宇都宮大学国際学部教員がテーマグループごとに日光の観光資源を訪問し、留学生・留学経験者の視点でのフィールドワークを行い、施設の方や地域のキーパーソン、旅行者などへのヒアリングを実施することで、食事や交通、情報など受入環境の課題について考え、「観光モデル」（＝あるべき姿、望まれる姿、留学生から見た魅力など）について提言・提案を行いました。

本報告書は、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（CPMS）と日光市国際交流協会による2019年度主催事業として、2019年12月7日に宇都宮大学UUプラザで開催された「国際交流都市日光の再発見—『観光モデルを留学生と考える』」シンポジウムの内容をまとめたものです。本シンポジウムでは、日光市での2日間のフィールドワークの経験を基礎に、『日光の歴史や資源を活かした観光地づくり』を国際的視野から留学生と共に意見交換を行い、国際交流都市日光の地域資源・観光資源を再発見のための提言を行うことを目的としました。参加者は、日光市、アジア、欧米など宇都宮大学留学生、海外経験のある留学生、大学関係者、日光市関係者などでした。

プログラムの内容は、第1部五木田玲子氏「奥日光健康診断と持続可能な観光地づくり」（公益財団法人日本交通公社 観光地域研究部 主任研究員）の講演、第2部「『観光モデルを留学生と考える』プロジェクト」のプレゼンテーション、それらのコメントの後、質疑応答を行いました。

本プロジェクトは、「2019年度宇都宮大学地域連携・貢献活動支援事業」の支援を受けております。

最後に、本プロジェクトおよび本シンポジウムで世話になった、日光市国際交流協会の会員の皆さま、学生のインタビューにご協力いただいた、日光市関係者の皆さま、テープおこしをしていただいた宇都宮大学国際学部の浅野琳香さん、助川菜々子さん、鈴木アリサさん、山田萌花さんなど関係者の方々に心からお礼を申し上げます。

2020年3月

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

センター員（グローバル担当） 重 田 康 博